

特集 プレゼンテーションの意義と活用①

情報科教育におけるプレゼンテーションの意義と プレゼンテーション大会の成果について —プレゼンピックの取り組み—

東京成徳大学中学・高等学校教諭 増澤 文徳
fmasuzawa@hi.tokyoseitoku.ac.jp

1. はじめに

日本ではIT（情報技術）という言葉をよく耳にするが、国際的にはICT（情報コミュニケーション技術）という言葉が用いられている。ICTのCは、ネットワーク社会の中の人と人とのつながりのことで、これからの情報教育に必要なものであり、積極的に取り組む必要がある。

昔と今では、コミュニケーションの形態が大きく変化している。家庭ゲームが発達する前は、みんなが外で遊び、ファミコン時代の到来とともに少人数で家の中で遊ぶようになった。現在ではインターネットやメールを使って1人で遊んでも平気な時代に突入している。見方を変えれば、社会環境が大きく変化してきているということである。そのような時代を受けて、教科「情報」では何をなすべきかを考えると、人と人とのコミュニケーションの必要性を感じざるを得ない。そこで、学校の枠を超えてネットワークを介したコミュニケーション力をつけることが最重要課題と考え、共通指導案にもとづいて各校が授業を展開し、プレゼンテーション大会を実施する計画を立案した。

情報元年に3校で取り組んだプレゼンテーション大会は、年々規模が大きくなり3年目を迎えた現在では、大会名称をプレゼンピックに変え、国公立・私立を含めた11校がこの取り組みに参加している。

■16年度参加校

- ・東京成徳大学中学・高等学校（東京都 私立）
- ・自由学園高等科（東京都 私立）

- ・日本学園中学・高等学校（東京都 私立）
- ・豊南高等学校（東京都 私立）
- ・東京学芸大学附属高等学校（東京都 国立）
- ・岩手県立大野高等学校（岩手県 立）

■17年度より参加校

- ・北海道石狩翔陽高等学校（北海道 立）
- ・西海学園高等学校（長崎県 私立）
- ・明星中学・高等学校（東京都 私立）
- ・聖学院中学校高等学校（東京都 私立）
- ・埼玉県立豊岡高等学校（埼玉県 立）

この取り組みの趣旨は、他校の生徒との「情報の共有とコラボレーション」を中心課題として捉え、創造的な思考力やコミュニケーションを育てていくものである。とかく、プレゼンテーションという「首を横に振る（ノーという）相手を何とか納得、説得させて首を縦に振らせる」ことが主目的となる。しかし、この取り組みでは、高校生にふさわしいプレゼンテーションというものを創作し、メディアにこだわらないプレゼンテーションで相手の心にプレゼントを施せるようなプレゼンテーションを行うことを目的としている。

2. テーマの設定

このプレゼンピックにおけるテーマの設定は、私たちがインターネットを利用する上で、いくつ

不正コピー	個人情報
肖像権	携帯電話
チェーンメール	ウィルス
出会い系サイト	ネットオークション
なりすまし	インターネット社会

もの危険地帯が待ち受けているものを想定して設定したものである。

特に学校における情報教育では、モラルよりも操作の教育が中心となることが多い。しかし、家庭では学校に対して情報教育に関するモラル指導を委ねているのが現状である。情報が氾濫する中、インターネットにかかわる生徒との関係をどのように構築していくかということについては、生徒が主体的に学ぶことができていないのが現状である。この協働授業からプレゼンテーション大会を通して、お互いに情報化社会に対するモラルを認識し、ネットのワナや危険に対する対処ができることを期待するものである。また、コミュニケーションの原点を Face to Faceに置き、正確なニュアンスが伝わりにくい文字情報から、自分が誰に何を伝えたいか



ミーティング風景

に応じて、独創的な表現方法を取り入れることにある。このテーマをもとにして教員が何回もミーティングを重ね、教員間の共通理解のもとに共通指導案を策定し、協働授業を展開している。

3. ネットワークを活用した授業展開

(1) 教員間の交流の場

まず、教員間の交流（意思疎通）の場としてメーリングリストを活用している。遠隔地にある学校とネットワークを結ぶとともに面識のない教員同士が意思疎通を図るには、情報掲示板としての役割を担うMLを効果的に活用する必要がある。

学校間のヒューマンネットワークを活性化させないと協働歩調が取れなくなる恐れがあるので、欠かせない一つの手段である。

(2) オリエンテーションの実施

生徒の意識を高揚させることを目的として各校が東京成徳に集結し、オリエンテーションを実施した。講演として声優でもあり東京成徳大学助教である青柳隆志先生に「効果的なプレゼンテーシ

ョンとは」というお話をいただき、打ち解けたところで互いに情報提供を行うコラボレーションの場を設け各テーマに分かれて情報交換を行った。

(3) Webカメラの活用

生徒間の交流を目的として、Webカメラの導入を試みた。最近ではWebカメラも安価に購入することができ、相手の顔を見ながらリアルタイムにボイスチャットができることに着目した。しかし、そこには大きな難関が待ち受けていた。

6校のうちMSNメッセンジャーでビデオ・ボイスチャットが成功したのはたったの1校であった。それぞれの学校のネットワーク環境に大きく左右され、ルータによっても通過しないケースがあることが判明した。Yahooメッセンジャーで再度試してみることを検討した結果、MSNメッセンジャーでは通過できなかった高校との通信が成功した。さらに他の学校とも順次テストを繰り返し、すべての学校と1対1で接続することができた。更なる展開として、4者間でYahooメッセンジャーが使えることが判明し、遠隔地とのビデオ会議も可能となる道筋を捉えた。

Webカメラを通して見る映像は、まだまだ粗いものであるが、相手の顔が見えることと肉声が聞こえることに利点がある。

様々なトラブルを乗り越え最終授業間近となったが、遅れながらも他校間との交流が展開できる運びとなり、今後の発展的な授業展開に大きな光が見えた。そして、プレゼンピックに参加している教員の試行錯誤の末、すべての学校をWebカメラで繋ぐことができた。これも他校の教員同士が力を合わせ、お互いのもって



Webカメラテスト

いる知識を共有しあいながらトラブルを回避していった結果である。他校の生徒同士が交わしたコミュニケーションは、Eメールという媒体を超えた刺激をもたらし、Face to Faceのコミュニケーションがいかに大切であるかを改めて認識させられた。

(4) ホームページを活用した授業展開

各学校での取り組みは、学校行事等の関係でずれが生じている。Eメール等でやり取りしているものの、他校の雰囲気を知ることは難しい。そこでこの授業に携わっている学校間で様々な報告をホームページ上に掲載していこうという目的で「プレゼンピック」というホームページを立ち上げた。

このホームページは、各学校の生徒のモチベーションの向上と教員の交流を深めるためにも功を奏した。昨年度のプレゼンテーション大会の様子や優勝作品を掲載することにより、それぞれの班が独自性を求めて切磋琢磨している光景が見受けられた。また、生徒の意識高揚を目的とするために、ホームページ上にDIARYという項目を設け、各学校が取り組んでいる様子を写真入りで紹介し、その学校の校内選考などの雰囲気をリアルタイムに報告していった。さらに、各学校でどのような先生方が指導されているのかもPROFILEという項目を通して伝えていった。生徒の知識向上



ホームページのTOP画面



DIARYの画面

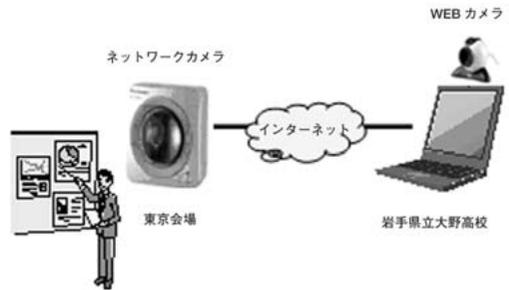
ホームページの構造

- TOP——DIARYとCOLUMNの更新状況表示
- DIARY——学校間の情報交流の場
- COLUMN——生徒・教員の知識向上の場
- GALLERY——過去の大会作品を展示
- PROFILE——教員の写真入り自己紹介の場
- BBS——掲示板による生徒間のコミュニティの場
- LINKS——授業を支援してくれる団体等を紹介

のためにCOLUMNを設け、各テーマにちなんだ事柄やプレゼンテーションに対する考え方など、一教員だけでは考えることができない幅広い角度に立ったコラムが寄せられた。このコラムを教員が月に1回書くことにより、様々な知識が蓄積され生徒とともに教員の知識向上に役立っている。

(5) ネットワークカメラの活用

今回の大きな課題は、東京都と岩手県を結ぶラインについてである。参加校6校のうち1校が遠隔地である岩手県の高校であるため、東京の5校は東京会場で実施できるが、岩手にある高校とのネットワークを考える必要がある。Webカメラでは、画像の転送速度から東京会場のプレゼンテーションをリアルタイムで見せることは不可能である。そこで、高速転送可能なネットワークカメ



ラを用いてメインの会場である東京から岩手に配信することを計画した。画像テストでは640×480ドットでも遜色ない動きをしており、音声も画像サイズを大きくすると若干遅れて聞こえる程度で、プレゼンテーションをリアルタイムで受け取ることができる。岩手会場では、Internet Explorerがあれば東京会場の画像と音声を受けることができ、東京会場にあるネットワークカメラのカメラコントロール機能を使って岩手会場のパソコン上からカメラを動かすことができるという利点がある。今後の発展性に備えて最大10アクセスまで可能な点でも複数の遠隔地とのプレゼンテーションを可能にすることができる。

東京から岩手への配信は可能となったが、岩手からの送信をどうするかが課題となる。様々な検討がなされたが、現状可能な最善の方法を考える

と岩手の生徒とのリアルタイム性を考慮することが重要である。東京会場でパワーポイントを操作し、Webカメラからの音声はネットワークの回線速度の問題もあるため、携帯電話を使って音声を東京会場に流しリアルタイムにプレゼンテーションするという手法が妥当であると考えた。

4. プレゼンピック大会での成果

大会当日、340人収容できる会場が各校から集まった生徒で満席となった。冬に実施した大会だが外気の寒さとはうって変わり、会場の熱気に発表者も緊張の様子がうかがえる。運営側としてネットワークカメラを用いたリアルタイム配信は、ネットワークのレスポンスによって映像が左右されることが気かりである。メインスクリーンの横に自立式のスクリーンと 프로젝タを準備し、岩手県立大野高等学校からの映像を映し出す。採点方法は、生徒一人ひとりに採点票を用意し、グループの発表終了と同時に採点を開始したが、チームに感想を書く欄もしっかり書かれており、同世代への関心が高いことを示していた。この大会を成し遂げて感じえたものは、それぞれの生徒によって異なっている。生徒の感想から抜粋してみた。

- ・みんなで協力して、1つの目標を目指すことができたことが良かった。
- ・最近、自分の意見を主張できる人が、あまりいないのでこういう経験ができてよかった。
- ・本当にプレゼンはプレゼントです。いかに相手に興味を持たせ、楽しませ、かつインパクトを与えるかが良いプレゼンのポイントとなっているのだと思いました。
- ・今回のプレゼン大会に参加して、私に足りなかったことがたくさんわかりました。



東京会場



岩手会場

大勢の前で発表するという経験は、チームワークの力で1つの目標に向かって努力したことが自信につながり、これからの将来に何らかの影響を与えるものと確信している。プレゼンピックという大会を通して、「コミュニケーション力」と「相手の考え方を理解する力」が備わったことと思う。

5. おわりに

この協働プレゼンテーション授業からプレゼンピック大会を通して感じたことは、「コミュニケーションが教育を変える」ということである。参加している教員は、「いかに生徒が楽しんで授業に取り組めるか」といったすばらしい授業デザインを構築している。授業をデザインするにあたり、授業の巧みさや専門知識の多さが授業成功の大きな要因ではなく、授業全体を見通して設計する力が必要である。そして、ネットワークを活用した生徒間・教員間のコミュニケーションこそが、教育を変えていくことにつながるのではないだろうか。

メール文化が浸透している今日、浅く広い人間関係が形成されている。ネットを通して人間関係を作り、成長していく時代だからこそ、学校という枠を超えインターネットを活用して同年代の生徒同士が意見を交わす場が必要となってくる。そこには、メールコミュニケーションでは味わえないWebカメラを活用した対面コミュニケーションの場も作り出すことが重要である。

各校の教員も大会運営においては、指示することなく場の雰囲気を感じながら臨機応変に対応している姿は、毎日顔を合わせている教員以上に意思疎通ができていることを物語っている。「情報教育交流会」という名の通り、お互いの交流を深め、授業で用いられるコンテンツを共有できる場を設けていくことが、これからの更なる課題である。

是非ホームページをご覧ください、私たちと一緒にコミュニケーションの場を広げていきませんか。

<プレゼンピックのホームページ>

<http://www.tokyoseitoku.ac.jp/ict/ict-index.htm>